特定失踪者

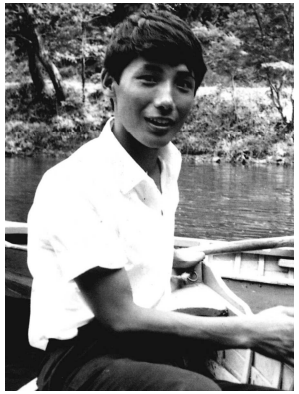
上田英司（うえだえいじ）さん

１９６９（昭和４４）年１１月４日
東京都又は京都府で失踪
（当時２０歳、伯耆町出身）

失踪時の状況　ー特定失踪者問題調査会の調査よりー

・１９６９（昭和４４）年１１月４日午前、「京都に行って来る。」と東京の下宿先の家主に言い残して外出したまま失踪。服装は黒色のコートで、荷物は紙袋一つだった。

・１１月初めに、お母さんが英司さんに荷物を送ったが、いつもある返事が来ないため、不審に思い電話をして、２０日頃いなくなったのを知る。



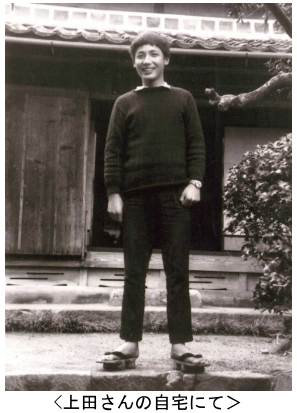
突然の失踪、家族にも思い当たるふしはなし

・家族が、友人やアルバイト先などへ聞き込みを行ったが、手がかりはなし。その後、家族により代々木警察署へ家出人捜索手続きが行われ、警視庁による家族への聞き取りが行われている。

・英司さんは大学で文学を専攻するため、同じ年の春に東京へ上京したばかりだった。

・親思いの方で、実直な人柄だった。１１月４日付けで、英司さんから家族の元に届いた葉書が最後の便りとなった。

・１１月の初め頃、英司さんが下宿先の家主に「喫茶店でのアルバイト代で買った」と言って、鉄瓶と湯飲みを見せている。「こんな湯飲みでお茶が飲みたかった。」と言っていた。英司さんの両親が、下宿先の部屋へ行ったとき、その鉄瓶に茶殻がそのまま残っていた。



〈上田さんの自宅にて〉

お母さんの上田貞子さんからのメッセージ

ーラジオ短波放送「しおかぜ」よりー

英司、元気にしていますか。あの日から永い永い年月が過ぎたね。お母さんですよ。

英司、母は思い出して、英司のこと毎日心配して過ごしています。父も英司君のことを大変心配して、必ず英司は帰ってくると神に誓って楽しみにしていたのに脳梗塞で倒れ、３年間頑張ったけど、英司に会う夢もかなえられず、残念で悲しい思いです。

母も足腰が悪くて、思うように外出もできなくて、英司君の件いろいろお世話になっています。

英司君、３６年間の間、顧みれば言い尽くせぬほどの道のりだったね。東京にも何回と行って尋ねました。あの頃は母も若かったし、皆様、友達にもお世話になりました。

＜高校の体育祭にて＞

昔のこと、色々と話をしたいですね。この手紙をきいたら、すぐお知らせてください。お願いします。英司君、永い間、色々なことがあったでしょう。故郷も変わりましたよ。でも、英司君が愛した大山は昔のままです。懐かしいでしょう、兄さんも家族皆会える日を楽しみに待っています。英司君、からだに気をつけて、一日も早く元気で会える日を楽しみにしています。

母より、英司君へ

あなたに会いたい

～北朝鮮による拉致の可能性がある者（特定失踪者）御家族の声～

北朝鮮に拉致された可能性が高いと考えられている一人が、伯耆町出身の上田英司さん（失踪当時20歳）です。英司さんのお母様の貞子さん、お兄様の淳則さんにお話をお聞きしました。

上田 英司さん

上田 貞子さん

上田 淳則さん

子どもの頃の思い出

母：素直でおとなしく、やさしい子でした。友達もたくさんいて、特に下の学年の子が「えいちゃん、えいちゃん」と慕って、ついて歩いていました。

何でもできる子で、小学校の時は学年代表で答辞を読みました。その時の原稿は今でも残しています。

努力家でもありました。中学３年生の夏休みから２学期中、病気のため長期間入院していたので、当時は留年の話もでたのですが、頑張って勉強して、高校に上位合格しました。

兄：弟は大山が好きで、小さい頃から大山によく登っていました。高校生の時は山岳部に入り、夏休みには、毎日大山に登っていました。

突然の失踪

母：大学進学を目指し、東京で予備校に通っていた昭和44年11月のこと。久しく音信不通になっていたため下宿に電話をしたところ、家主さんから、英司が「京都に行く」と言ったまま、帰って来ていないことを聞きました。

下宿に行ってみたところ、部屋はきちんとしていて変なところはなく、友達にも会って話を聞きましたが「変わった様子はなかった」と言っていました。

その当時は拉致という言葉も聞いたことがなく、法律上では失踪後７年経過すると死亡届を提出することとなっていたため、昭和54年に死亡届を提出しました。

テレビニュースを見て

母：平成14年10月、拉致被害者の蓮池さんたちが帰国した様子をテレビで見て、もしかして英司も…と思い、すぐに警察に相談しました。

警察から県庁に相談するよう勧められ、県庁に相談すると、拉致問題に詳しい人として、特定失踪者問題調査会の方を紹介してもらいました。

英司へ

兄：小さい頃、大山に一緒に登ってキャンプをしましたね。失踪して最初の10年間くらいは夢に出てきていたのに、今頃は夢にも出てきませんね。英司に会いたいです。英司の家族にも会ってみたいです。

母：最後にあなたにあったのは、昭和44年の８月、成人式に出席するために帰って来た時でしたね。

英司のことを忘れた日はありません。夜も眠れない日があります。きっと結婚し、家族をもって元気に暮らしているのでしょうね。せめて電話でもいいので、今の様子を教えてくれたら安心します。でも電話もできないところにいるのでしょうね。

英司が過ごした家の周りは随分と変わりました。ただ一つ変わらないのは、あなたが愛した大山です。大山は昔のままですよ。懐かしいでしょう。早く帰って来てください。あなたに会いたいです。

とっとり人権情報誌　「ふらっと」第21号より
（平成26年６月　鳥取県人権局人権・同和対策課発行）